

特別支援教育実践マニュアル

<No.18>

不登校（傾向）の子への支援

～発達の違いや偏りのある子の視点から～

発達に遅れや偏りがあると、不登校を経験する率が高くなります。

その数については、調査研究によって多少のばらつきはありますが、発達障害と診断される子の1割～3割が不登校を経験するという報告が大勢を占めます。

浦安市教育委員会（適応指導教室）では、不登校で相談に訪れる児童生徒のうち、発達に遅れや偏りのある子が何人いるのかという集計を実施しており、3割～5割の子にその傾向があるという結果を得ています。

発達に遅れや偏りのある子への支援に、不登校（傾向）への対応は不可欠です。

今号では、発達に遅れや偏りのある子が不登校傾向を示している時期から不登校となった後まで、そのフェーズ（段階）ごとに望ましい支援を提示します。

なお、ここに示す支援方法はどれも、発達の遅れや偏りの有無を問わず、不登校全般に効果が期待できるものです。

不登校（傾向）のフェーズ（段階）ごとの対応・支援

未然防止：居場所感や絆を実感できる学級づくりと
遅刻や別室登校をする子への対応

初期対応：児童生徒が学校を休み始めた直後から
数週間にわたって展開する対応

事後対応：欠席が30日を超える児童生徒に対し
学校復帰や社会復帰を目指して行う支援

未然防止



「わかる授業」が大切です。

- 子どもの発言や頑張りを認める
- 目立たない子の意見を取り上げる
- 一つのことをやり遂げる時間を保障する
- 子ども同士が認め合える場面を設定する etc.

「わかる授業」をベースに、発達の特徴に応じた支援をしましょう。発達の遅れや偏りは軽度であっても、登校をしづむ様子が保護者から報告されるようであれば、早い段階で「個別の指導計画」を作成（更新）してください。

遅刻を繰り返す場合

<保護者と…>

- ① 生活リズムを確認する
- ② 登校後の過ごし方を事前に打ち合わせておく
- ③ ゲーム機・スマホ等の使用に関するルールを確認する

大幅に遅刻する場合でも、通常の登校時間に合わせて朝の着替えや朝食を済ませることが肝要であることを、保護者に伝えましょう。

いつ誰が出迎えるか、登校した後どこ（別室等）で何をしたらいいかを明確に伝えると、保護者が子どもを送り出しやすくなります。

夜遅くなってからの使用の弊害を保護者に伝え、家庭でのルールについて話し合ってもらおうとよいでしょう。



一日の計画を本人に立てさせます。そして、チャイムに合わせた行動を意識させます。「元気そうだね、教室へ行こうか」といった励ましは、唐突な促しとして困惑させます。

（教科）担任が課題を用意し、授業の終わりには評価するようにしましょう。子どもは、教師から良い評価を受けたいものです。

衝動的な行動をとる子や不注意な子、理解力が弱い子、不器用な子、気持ちを察するのが苦手な子たちの多くは、対人関係で悩んでいます。



別室登校をする場合

<職員で協同して…>

- ① 見通しを持って過ごせるようにする
- ② 学習場面を設定する
- ③ ソーシャルスキルトレーニングの必要性の有無を検討する

初期対応



子どもは、学校に行けない自分を「そっとしておいてほしい」と思う一方、「見放されたくない」とも思っています。

こだわりや被害者意識が強いと、不登校は固定化しがちです。うつ病などを（二次障がいの的に）患っている場合を除き、安心して登校できるような積極的な手立てが肝要です。

保護者は、学校に行けない子ども以上に不安定になりがちです。担任の親身な対応を実感することで、子どもに辛く当たらずに済むようになります。



1日休んだだけで、子どもは翌日の学校生活が不安になるものです。

欠席 2~3 日目

- ① 夕方には電話をして、本人に安心して休むよう声をかける
- ② 病欠以外で欠席が 3 日続いた場合には、家庭訪問をする

子どもは、担任からの働きかけに敏感になっています。保護者の応答の様子から、担任の言葉を想像します。保護者が安心した口調で話せるように心がけましょう。

一度始めた支援は、途切れたり間隔が空き過ぎたりしないようにしましょう。訪問は週 1 回の頻度を保ちましょう。

担任、学年主任、養護教諭、部活顧問、SLC 等でチームを作り、別室登校や夕方の登校など、本人が安心して登校できる環境づくりをします。



勉強面での不安が高くなる頃です。授業の進み具合を伝え、プリントの一部分に印をつけ、「ここだけは覚えよう」等とメッセージを入れて渡しましょう。

原則として事実を伝えます。「朝起きると、頭が痛いんだって。でも、病気や怪我ではないから安心してください」等。なお、いじめや友人関係を理由に休んでいる場合、クラス全員で考える時間を設けましょう。

1 カ月で欠席 5 日以上

- ① 管理職に欠席理由を報告し、チームで手立てを検討する
- ② 授業の進み具合を伝える
- ③ クラスメイトに伝える欠席理由について保護者と確認する

事後対応



待ちの姿勢ではなく、手を差し延べる姿勢（アウトリーチ支援）が重要です。接触する機会が少なくなっているぶん、より細やかな継続した支援が求められます。

訪問による支援

- ① 担任が定期的に訪問する
- ② 自発的に希望する友だちに訪問を依頼する

訪問する子が、「せっかく行ってあげたのに、あの態度は何だ！」等と思わないよう、あらかじめ、「来てくれたことがうれしくても、その気持ちがうまく表現できないこともあるからね」と伝えておきましょう。

約束の時間に遅れるのは厳禁です。子どもは緊張して待っています。会えない場合は、来たことを伝えるメモを置いてきましょう。

クラスの様子を伝え、気持ちが学校から遠ざからないようにします。

「元気そうで良かった。いつでも学校に来れそうじゃないか」「みんな心配しているぞ」等、安易な激励は禁物です。励まされると負担に感じる子がいます。「今は休養が一番。元気になったらいろいろ挑戦できるから、焦らなくて大丈夫だよ」等、登校できない現状を肯定しましょう。

保護者との連携



- ① 日中の過ごし方を確認する
- ② 宿題等の受け渡し方を決める
- ③ 欠席の連絡ではなく、登校できる日の朝の連絡に変える
- ④ 別室登校（時間を遅らせての登校）の可能性を探る

友だちが学校で過ごしている時間帯に間食をしたり、ゲームやインターネットで遊んだりしないようにしてもらいましょう。現実逃避の傾向を助長しないようにします。

家庭訪問の際に行うか、保護者同伴で夕方に登校できるようであればその際に行います。

毎朝「今日もダメだ」と落胆の中で連絡をしなくて済むよう、登校できる日の朝に連絡してもらおうようにしましょう。

まなびサポート事業

教育研究センター <富岡小学校内> 381-7960・7961

まなびサポート相談室 <見明川中学校内> 390-5204

不登校の相談

教育相談 <適応指導教室内> 351-1151

*「いちよう学級」「訪問相談」が併設されています。

